The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞伊井春樹著『大沢本源氏物語の伝来と本文の読みの世界』
Author(s)	前田, 恵里
Citation	語文. 2017, 108, p. 105-106
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71012
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

伊井春樹著『大沢本源氏物語の伝来と本文の読みの世界』

前　田　恵　里

本書は、源氏物語千年紀の二〇〇八年に、著者によってその存在が明らかとなった『源氏物語』古写本、「大沢本源氏物語」の伝来及び本文に関する研究をまとめたものである。

以下に、本書の構成を示す。

一　『源氏物語』の本文をめぐる課題　1源氏物語の書写本／2本文の伝来／3大島本の出現／4大島本青表紙本の問題点／5大島本の本文の性格

二　大沢本源氏物語の伝来　1小杉椙邨の『鑑定雑記』／2小杉椙邨の調査記録／3大沢家の宝物／4前田香雪の鑑定／5香雪の筆者目録／6正木直彦、今泉雄作、池辺義象等の覚書

三　大沢本源氏物語の書誌　1池田亀鑑の調査／2大沢本の書誌

四　源氏物語のことばと物語の展開　1阿仏尼と親行の交流／2俊成と光行との校訂／3『源氏物語』の読み／4本文の二大系統／5「しげき野中」「野道の太政大臣」

五　大沢本の出現　1書写過程の変貌／2朧月夜の性格／3夕霧像の変貌／4大沢本の読みの方法／5浮舟の入水事件

六　大沢本の合点―注釈の方法　1注釈の初期形態／2大沢本合点の性格／3諸本による合点の性格

あとがき

第一章では、これまでの源氏物語本文研究の展開と今後の課題を整理する。物語成立以降、多様な伝本が流布した『源氏物語』だが、鎌倉時代に入って正統な本文が求められるようになり、源光行・親行父子の校訂した河内本、藤原定家の校訂した青表紙本の二つが本文として定着した。そして、現在は青表紙本の一つとされる大島本が大半の注釈書で底本として使用されている。しかし、定家筆本に依拠したという保証が無いこと、他本との校合によって多数の書き入れや抹消がなされたことを踏まえ、著者は大島本を絶対視する危うさを強調する。

第二章では、明治期の古典学者・小杉椙邨の記した調査記録、大沢本に添えられた二巻からなる鑑定識語、前田夏繁（香雪）による「各筆源氏物語筆者目録」といった大沢本の伝来に関わる資料についての考察がなされている。

大沢本源氏物語は、護良親王の後裔とされる大沢家が、第十七代護久の時に豊臣秀吉から拝領したと伝えられるもので、第三十代の大沢菅二が叔父清臣と交流のあった小杉のもとにこれを持ち込んだ。小杉は大沢家の由来、自らとの関係を記述するとともに、古筆関係者らに鑑定識語を依頼し、その一人であった前田夏繁が筆者目録を作成したという次第だ。そして、著者はこれらの付属文書によって大沢本の権威付けが図られたと指摘する。

第三章では、池田亀鑑の大沢本調査の問題点と書誌について述べる。まず、『源氏物語大成』にまとめられた池田の調査に宇治十帖が含まれておらず、再調査さえなされなかった背景として、

所有者の権利関係の複雑さを挙げる。このことからも、本書に記された調査結果が、いかに価値のあるものか容易に理解できよう。

また、書誌からわかる大沢本の特徴として、基本的な行数を十行としながらも、そのばらつきが大きい点、書写年代が鎌倉から室町末に分散しており、多様な筆跡が確認できる点を指摘する。

続く第四章では、源氏物語本文のあり方とそれによる解釈の変化について述べる。その中で、中世に流布した多様な本文と解釈の異なりについていくつか例を挙げながら説明し、河内本と青表紙本のいずれにも分類できない本文系統、「別本」に注目することが、本文の統合化を迎える鎌倉時代以前の『源氏物語』を明らかにする上で有意義であると強調した。

第五章では、大沢本の本文表現についての考察がなされている。ここでは、諸本との異同が見られる例の一つとして、花宴巻末尾の本文異同が挙がっており、非常に興味深い。

大島本など諸本の大半が「いとうれしきものから」という言葉で花宴巻を終えるのに対し、大沢本では「かろ〳〵しとてやみにけるとや」という一文がそれに加えられ、その上墨で削除を示す棒線も引かれているという。そして、これに関して、朧月夜との最初の逢瀬を語る花宴巻と、二度目の逢瀬を語る賢木巻との間には四年もの時間の隔たりがあるため、大沢本では朧月夜を軽々しい女性と評して一旦二人の交際を断絶させることで、その時間的空白を説明したと指摘する。著者の言うように、大沢本の本文表現を通じて、現存本とは異なる物語世界が読み解かれた事例であるのは疑い得ない。

この他にも、夕霧巻末尾に他本にはない「なにはの浦に」という一句が添えてあること、蜻蛉巻冒頭の浮舟入水後の物語展開が他本と異なることなど、大沢本の独自性を窺い知れる例が挙がっている。

第六章では、注釈の初期形態でありながら、従来あまり注目されてこなかった合点について検証が行われている。そして、大沢本の合点は、主に引歌や典拠に関するものであり、「今日流布するような詳細な注釈書ではなく、よりハンディな内容の注記が本文に付属し、そこから所持者の判断によって筆を入れたのではないだろうか。」と指摘する。

以上が本書の概観である。先に述べたように、大沢本源氏物語は源氏物語千年紀にその存在を明らかにされたため、大きな話題となった。それに配慮してのことであろうか、本書は『源氏物語』本文研究における基礎知識から近年の研究成果までがわかりやすくまとめられており、初学者も理解しやすい内容となっている。本書によって、今後の『源氏物語』研究が新たな広がりを見せることは確実であろう。

（おうふう、二〇一六年一〇月、二三六頁、二八〇〇円＋税）

（まえだ・えり　本学大学院博士前期課程修了）